

# 『黒塚―白頭』

詩人 村瀬 和子

作者 不詳・近江能系統か

典拠 拾遺集・平兼盛の歌など 季・所秋、陸奥安達原

あらずし

熊野の那智の東光坊の阿闍梨祐慶一行が、黒塚にさしかかると日が暮れてしまふ。灯火を頼りに宿を借りようと一軒家に近づくと、女の一人住まいのわびしいひとりごとが聞こえてくる。世の中から遠く離れて生きる女の哀れさが身にしみようだ。旅人に「異草もまじる茅筵、うたてや今宵敷きなまし」。雑草さえまじった草の筵ながらどうぞお敷き下さい。貧しい暮らしの中に、雑草の匂い立つ草むしろ、聞いているとほのかな草の香りが漂うような趣がある。

女主人は、旅の慰みにと、糸車を廻しながら、人生の空しさ、はかなさを物語り、美しい糸づくしの歌を歌つてもてなした。夜も更け、客を暖めるための柴を取りに出掛ける女は、留守中決して閨を見るなど固く戒める。供の能力は「見るな」と言われて、かえって見たくなり、禁を破って閨をのぞくと屍がうず高く積みまわっていた。驚き恐れて逃げる一行。女は、裏切られた憤りに本性の鬼となって追い迫り、山伏の背信をなじって激しく襲いかかるが、山伏の法力に折り伏せられる。

使用面について

『黒塚』は『紅葉狩』と共に、もともとは〈シカミ〉の面をつけるのがきまりであった。

〈般若〉をつける曲に『道成寺』『葵上』『鉄輪』と『黒塚』『紅葉狩』の五曲が挙げられる。

前の三曲は愛の究極において鬼女に変貌せざるを得なかった女の深層心理を彫り込んで、極めて人間的なテーマであり、後の二曲は人間に害をなす鬼畜物としての扱いを受けていた。

〈般若〉が〈シカミ〉の面と決定的に異なるのは、女面であるということであり、人間的な苦悩と哀切を滲ませていることである。『紅葉狩』の華麗で濃艶な鬼女のイメージとは異なり、女の孤独と業、人間の二面性を厳しく追求した『黒塚』は早くから〈般若〉の能として位置づけられていた。

素材について

『黒塚』は、安達原の鬼女説話をふまえて詠んだ光孝天皇五

## 代の孫・平兼盛の歌

みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか

を素材として、大和物語などを経て、能に形成された。この一首は清和天皇の第三皇子・貞元親王の孫・源重之の妹に贈った歌である。兼盛は

忍ぶれど色に出にけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで

で、百人一首に選ばれ、業平・小町と共に三十六歌仙として十世紀を活躍した歌人である。だが、藤原氏全盛の世にあっては兼盛・重之共に、賜姓の皇族といいながら身分の上では恵まれず、うつつと晴れない心を和歌によって慰め、共に流離の運命を辿る。美貌を惜しまれながら、はるかな東国に埋もれようとしていた高貴な姫君に向かって、兼盛はあえて「鬼こもれりといふはまことか」と歌いかけ、貴種流離の哀切に自身の憂愁を重ね合わせた。この延長線上にあるのが黒塚の女の疎外者の悲しみといえよう。

### 『黒塚』のみどころ

① 前場、糸繰りの場面で「まそをの糸の繰り返し」と、細く長く引き出される糸に、有為転変、無常にして無情な人生をかこちつつ、人間の宿命と輪廻を象徴的に描く。

② アイの展開する（見るなの寝屋）。禁じられた物を見たために不幸が起る説話は、古事記の「黄泉の国」でイザナギの妻イザナミが亡くなったあと、黄泉の国へ訪ねて行った

イザナギが「我をな視たまひそ」という妻イザナミの禁を犯して見て、「吾に辱見せつ」と怒りを買って、黄泉醜女に追われた話など、世界各地にある。

見るなという禁を侵して、山伏一行が見たのはうず高く積まれた人の死骸であり白骨であった。中人前へわらわが帰らんまでこの闇の内ばし御覧じ候な構えて御覧じ候な此の客僧も御覧じ候な∨の三度の（な）の禁忌は、『黒塚』のキーワードである。

③ 背信によって潜在していた魔性が引き出され、女は鬼女となる。山伏一行を追いかけ、法力によって調伏されるが、鬼女の肩には山伏に暖をとらせるための柴が負われている。山伏の（祈）に祈り伏せられ、嵐の中に消え去る鬼女。それは、常に裏切られることを知りつつ、人に尽くす人間の哀しみと憤りであり、中世の暗黒を生きた庶民の心象風景であった。

### ついでに

この能が書かれた時代、南北朝の争乱などによる棄民流浪の悲劇が絶えなかった。安達原の茅屋は、野中の一軒家に化びて住む老女が空しく世を送り、この世の儚さを見つくし知りつくして後、なお悟り難く抱き続けるこの世への愛情であ

り執心といえよう。

『黒塚』の鬼の岩屋の旧跡は、福島県二本松の真弓山観世音寺にある。私が訪ねた時には、巨岩を積み重ねた鬼の棲家の前に鬼女の模型が立っていて、ほのぼのとおかしくもあった。

真弓山観世音寺に伝えられている物語によれば、女は都の公家に仕える乳母のなれの果て、となつてゐる。物言わぬ姫の病を治すために、胎児の生き肝を求めていて、その結果母を尋ねてきた娘の胎児の肝を奪い、それを東光坊に見破られてしまったと言う。

女は自分の娘を殺してしまったというおぞましい記憶を消すためにその後も幾人もの妊婦を殺したのであるうか。

東光坊に祈り伏せられた女が、(黒塚に隠れ棲みしも浅まになりぬ浅ましや恥かしのわが姿や)、と情けなく惨めな姿を見られたことを恥じて声のみ残して闇に消えて行くというラストシーンは能の手法であり、黒塚の闇は人間の暗黒部にふれるものがある。

## 小書「白頭」について

『黒塚』に「白頭」という小書がつくと、前シテは姥の面となり、萩小屋にすすきがつく。後シテ白頭・大元結。早笛で出て緩急の呼吸激しく、キリは幕内へ飛び込む。

(糸車)の小書と併用されることが多い。(糸車)の小書は、金剛流のもので、いつもより思い入れ深く輪廻の糸を繰る。

中入前、山伏一行に禁忌を侵すなど念を押し、柴を取る山を見上げる心持ちで、このとき既に後姿に妖気を孕んで幕に入る。

昭和五十六年二月、中日五流能に於ける二世金剛巖宗家の『黒塚「白頭・糸車」』は裏切られた者の憤りと生きることの哀しさを深く内側へ彫り込んで、長く生きた者は鬼になるのかと、語りかけてくるような見事な舞台であった。

また平成十八年十一月廣田陸一師の『黒塚』は、人間の仏性と魔性を描き分けて、ラストシーン萩小屋を振り返りざま闇に消えて行くシーンが印象的であった。